

「中学校英語科における発音指導への一考察」

— 教師の影響力 —

広島大学大学院 田邊祐司

1. はじめに

かって発音指導といえば、個々の音のマスタリーを主眼に置いたものであったが、Penningtonの指摘するように (207), communication 及び interaction 理論の台頭とともに、リズム・ストレス・イントネーション等の suprasegmental features を中心に据えた discourse-based の指導が、近年主流になりつつある。このいわゆる bottom-up から top-down への発音指導の推移は、主に最近の Sociolinguistics の成果に負うところが大きいのであるが、本研究は視点を換え日本の学校教育の現場から、実際の中学校の授業分析を基に、suprasegmental features 指導の重要性を明らかにしようとするものである。

2. 分析方法

対象とした授業は、広島大学附属中学校3学年の3つの授業（1つは教師、残り2つは教育実習生によるもので、録画の後、忠実に記述され、その中から発音指導上、最初のステップであり、なおかつ最も一般的な形態である、教師によるモデル提示→それに続く生徒（全体）の choral repetition に焦点をあて、モデルと生徒の performance 間の「ずれ」を中心に分析を行った。この「ずれ」とは、与えられた音声と生徒の再生力とのひらきを示すもので、この点に関して、native speaker 3人を含む複数の目と耳で検証を行った。なお、ここで言う教師によるモデルには、テープ・レコーダーによるものも含めることにした。

3. 分析結果

図1は基本文型の音読練習におけるモデルの音調と生徒の音調を、Prator 及び Trager & Smith の表記法に従って、忠実に表記したものである。

図 1

[リズム・ストレス・イントネーションに関するもの]

モデル (教師)	生徒の repetition
(1) <u>This</u> is the <u>ring</u> my <u>húsbánd</u> <u>gáve</u> me.	<u>This</u> is the <u>ring</u> my <u>húsbánd</u> <u>gáve</u> me.
(2) <u>This</u> is the <u>ring</u> he <u>bóught</u> in <u>Fukúyama</u> .	<u>This</u> is the <u>ring</u> he <u>bóught</u> in <u>Fukúyama</u> .
(3) <u>This</u> is the <u>clóck</u> my <u>bróther</u> <u>gáve</u> me.	<u>This</u> is the <u>clóck</u> my <u>bróther</u> <u>gáve</u> me.
(4) <u>This</u> is the <u>clóck</u> <u>I</u> like the <u>best</u> .	<u>This</u> is the <u>clóck</u> <u>I</u> like the <u>best</u> .
(5) <u>Get</u> <u>óff</u> . <u>Get</u> <u>óff</u> the <u>street</u> <u>car</u> .	<u>Get</u> <u>óff</u> . <u>Get</u> <u>óff</u> the <u>street</u> <u>car</u> .
(6) <u>What</u> do <u>yóu</u> <u>call</u> <u>this</u> in <u>English</u> ? <u>We</u> <u>call</u> it a <u>rúler</u> in <u>English</u> .	<u>What</u> do <u>yóu</u> <u>call</u> <u>this</u> in <u>English</u> ? <u>We</u> <u>call</u> it a <u>rúler</u> in <u>English</u> .
(7) <u>What</u> dou <u>yóu</u> <u>call</u> <u>this</u> in <u>Japanese</u> ? <u>We</u> <u>call</u> it " <u>Kyóka</u> sho" in <u>Japanese</u> .	<u>What</u> dou <u>yóu</u> <u>call</u> <u>this</u> in <u>Japanese</u> ? <u>We</u> <u>call</u> it " <u>Kyóka</u> sho" in <u>Japanese</u> .
(8) <u>I</u> have a <u>friend</u> <u>whose</u> <u>racket</u> is <u>very</u> <u>good</u> .	<u>I</u> have a <u>friend</u> <u>whose</u> <u>racket</u> is <u>very</u> <u>good</u> .

実際の音声なしに、紙面上でモデルと生徒の反応のずれを書き表すことには、かなりの制約はあるが、以上の8例のどれを比較しても、生徒がモデルの音調に対して実に敏感に反応していることがわかる。例(1)~(4)はいわゆる接触節の文型であるが、主情報を含む単語の上にストレスをきちんと置いて生徒は発音しており、特に(4)では“I”の上に前後の文脈（ここでは書き記していないが）からストレスがくるのだが、生徒は素直にここにストレスを置いて音読を行っている。同じようなことは(6), (7), (8)等でも見受けられ、例えば(6)では、教師が文脈を考え（これも省略），“you”にストレスを置いて発話すると、きちんとそれに従っていることがわかる。イントネーションに関して、同じように生徒のはほぼ正確な追従が見られる。(8)はその良い例である。

次は本文の音読練習における例であるが、同じようにモデルと生徒の反応間のずれを検証してみた。なお、この比較でモデルがテープとなっている本文の音声表記は、教科書のを、そのまま借用した。

図 2

[本文の音読練習における例]

(1) モデル (テープ)

It was from Africa. Picasso was very interested in it. As soon as he got home, he began to draw a picture. He wanted to capture the beauty he found in African art.

(2) モデル (教師)

It was from Africa. Picasso was very interested in it. As soon as he got home, he began to draw a picture. He wanted to capture the beauty he found in African art.

(3) モデル (テープ)

Wednesday, April 23. Clear Father came home from his trip to Europe. He gave a present to each of us. Mine was a watch he bought in Switzerland. It is a very nice watch. Mother and Jane got dresses made in France. After dinner Jane said, "Let's try on the dresses Father brought us, Mother." They looked at themselves in the mirror for a long time.

(4) モデル (教師)

Wednesday, April 23. Clear Father came home from his trip to Europe. He gave a present to each of us. Mine was a watch he bought in Switzerland. It is a very nice watch. Mother and Jane got

生徒の repetition (全体)

It was from Africa. Picasso was very interested in it. As soon as he got home, he began to draw a picture. He wanted to capture the beauty he found in African art.

生徒の repetition (全体)

It was from Africa. Picasso was very interested in it. As soon as he got home, he began to draw a picture. He wanted to capture the beauty he found in African art.

生徒の repetition (全体)

Wednesday, April 23. Clear Father came home from his trip to Europe. He gave a present to each of us. Mine was a watch he bought in Switzerland. It is a very nice watch. Mother and Jane got dresses made in France. After dinner Jane said, "Let's try on the dresses Father brought us, Mother." They looked at themselves in the mirror for a long time.

生徒の repetition (全体)

Wednesday, April 23. Clear Father came home from his trip to Europe. He gave a present to each of us. Mine was a watch he bought in Switzerland. It is a very nice watch. Mother and Jane got

dresses made in France. After dinner Jane
 said, "Let's try on the dresses Father
 brought us, Mother." They looked at
 themselves in the mirror for a long time.

dresses made in France. After dinner Jane
 said, "Let's try on the dresses Father
 brought us, Mother." They looked at
 themselves in the mirror for a long time.

この比較からも, suprasegmental features に関して, 生徒が比較的正確に従っていることが伺える。例えば, (1)のテープによるモデルでは, 2行目の "As soon as he got home" の箇所
 の "home" にストレスが置かれ, 生徒もそれに従っているのだが, このテープによるモデル提
 示直後の教師による音読で, 教師が "got" にストレスを移動して読めば, ためらうことなしに
 生徒もこれに追随している。又, (3), (4)の場合にも, 5行目の "Mother and Jane" の箇所
 で, 教師がテープとは違って tertiary level の pitch で文章を始めると, 同じような pitch で音読を
 始めている。

このように, suprasegmental のレベルでは, 生徒の反応は実に素直であるという結果を, 今
 回の分析は示している。これはとりもなおさず, 授業中のモデルの影響力の強さを証明している
 ことになる。

しかしながら, 今回, 参考のため同時に分析した segmental features の領域では, 図3にあ
 るように, native speaker がコミュニケーション上問題ありとしたエラーが数多く見受けられ
 たことも事実である。なお, 図3は提示モデルの後の生徒による repetition の中のエラーの数例
 であり, 下線部がエラー箇所を示している。

図 3

[個々の音に関するもの]

- (1) ---, you'll find the city college on the right.
- (2) resources
- (3) rich
- (4) natural
- (5) Is that the clock your brother gave you?
- (6) They looked at themselves in the mirror for a long time.
- (7) I have something to show you.
- (8) Wednesday, April twenty-fifth
- (9) Mother and Jane got dresses made in France.
- (10) Let's try on the dresses Father brought us, Mother.
- (11) Switzerland
- (12) themselves
- (13) ---, he found in African art.
- (14) ---, whose works changed the history of art.

これも実際の音声なしには説明しにくいだが, (1), (2)は /S/ の発音に関するエラーであり, (3)
 の rich は, 短母音の /I/ が長音化され reach と native の耳には聞こえ, (4)の natural にいたっ
 ては, 語頭の /n/ 音と, 語中の /t/ 音が弱いのか, native 3人が3人も旧約聖書の Joshua と
 聞こえると指摘をしている。以下省略するが, このように segmental features の領域とは対照
 的に, 自分なりの発音を堅持していることがわかるのである。つまり, この領域では生徒の追随

性は余りなく、むしろモデルと生徒の間には大きなずれが存在することが確認されたのである。

以上の結果から、逆説的な見方ではあるが、suprasegmental featuresの指導は一般に考えられている程、難しいものではなく、むしろ生徒側の受け皿はできているのではないかと考えられるのである。考えてみれば、現在の生徒はいろいろなmediaを通して英語の音声を耳にしているのである。特に音楽からの影響は大きいのではないだろうか。個々の音に関しては問題はいくつあるだろうが、リズム等の問題に関しては、むしろわれわれより柔軟な耳を持っているのではないかとさえ思えるのである。Kelly(61)によれば、発音指導はintuitiveなapproachとanalyticalなapproachに分かれるという。今回の分析結果で明らかになった生徒のsuprasegmental featuresの領域における追従性を踏まえれば、この領域の指導では、analyticalな側面も、もちろん大切ではあるが、intuitiveなapproachも有効な側面を持つことが示されているように思われる。さらには、その段階におけるモデルの役割は一層重要になると考えられる。以上が、分析結果から得ることのできた発音指導に対する教育的な示唆である。

6. おわりに

今回の分析は、教室における生徒の実態を踏まえたアプローチであったが、今後とも理論研究とともに、この領域に関して研究を進めて行くつもりである。

参考文献

- 安倍 勇『英語イントネーションの研究』東京 研究社 1958.
後田忠勝「音声指導における良い授業」『英語教育』31. no.6 (1982), 15-17.
五十嵐二郎・小篠敏明「英語科における指導法の実証的研究」『教育実習前における基本的指導法に関する実証的研究』（広島大学学校教育学部特定研究グループ, 1985), pp. 29-41.
五十嵐二郎『英語授業過程の改善』東京 大修館 1981.
池浦貞彦「発音についての到達目標」『英語教育』27. no.2 (1978), 15-17.
石井正之助編『聞き・話す領域の指導』（講座・英語教授法 第4巻）東京 研究社 1970.
一色マサ子・松井千枝『英語音声学—日本語との比較による—』東京 朝日出版社 1978.
江川泰一郎編『入門期の英語指導』東京 明治図書 1969.
大塚高信監『米会話発音教本』東京 南雲堂 1976.
大西雅雄『英語発音の研究』東京 旺文社 1948.
小川 茂『英語の発音・音読の条件』東京 敬文堂 1981.
奥田夏子『英語のイントネーション』東京 英和出版 1975.
小篠敏明「英語科教育学の授業実践」『教科教育学研究—第2集』（日本教育大学協会研究促進委員会, 1985), pp.219-241.
金田道和編『英語の授業分析』東京 大修館 1986.
ガレー, P. 鈴木保太郎・五十嵐二郎訳『英語教授法』東京 御茶ノ水書房 1965.
ケニヨン, J.S. 竹林滋訳注『アメリカ英語の発音』東京 大修館 1971.
小泉 保・牧野 勤『音韻論 1』（英語学大系第1巻）東京 大修館 1971.
佐藤 喬『読み方の指導』（英語教育ライブラリー第3巻）東京 開隆堂 1976.
島岡 丘『最新の音声学・音韻論』東京 研究社出版 1987.
_____『教室の英語音声学Q&A』東京 研究社出版 1986.
_____「1980年代の音声指導の方向」『英語教育』31. no.2 (1980), 21-25.

- Tanabe, Yuji. *The Teaching of English Pronunciation : A Historical Sketch*. Unpublished M.A. Thesis, Hiroshima University, 1988.
- 土屋澄男『英語指導の基礎技術』東京 大修館 1983.
- 鳥居次好・兼子尚道『英語発音の指導』東京 大修館 1969.
- 中津燎子『呼吸と音とくちびると』東京 午夢館 1975.
- 長沢邦紘『教師のための英語発音』東京 開文社 1987.
- 日比 裕・重松鷹泰『授業分析の方法と研究授業』東京 学研 1978.
- 藤井健三『現代英語発音の基礎』東京 研究社出版 1986.
- 牧野 勤『英語の発音』東京 東京書籍 1977.
- 松坂ヒロシ『英語音声学入門』東京 研究社出版 1987.
- 水光雅則『文法と発音』東京 大修館 1985.
- ロベルジュ, クロード他『V T法による英語発音指導教本』東京 大修館 1985.
- 渡辺和幸『英語のリズム・ハンドブック』東京 弓書房 1980.
- _____「大学生の朗読とその問題点」『英語教育』27. no.8 (1978), 42-45.
- Gilbert, Judy B. *Clear Speech*. Cambridge : Cambridge University Press, 1986.
- Kelly, L.G. *25 Centuries of Language Teaching*. Rowley, Mass : Newbury House, 1969.
- O'Conner, J.D. *Phonetics*. England : Penguin Books Ltd, 1973.
- Parish, Charles. "A Practical Philosophy of Pronunciation." *TESOL QUARTERLY*, 11, No.3 (1977), 311-317.
- Pennington, M. C. & Richard J. C. "Pronunciation Revisited." *TESOL QUARTERLY*, 20, No.2 (1986), 207-225.
- Prator, Jr., C. H. *Manual of American Pronunciation*. New York : Holt Rinehart & Winston, 1967.
- Stevick, E. W. "Toward a Pratical Philosophy of Pronunciation : Another View." *TESOL QUARTERLY*, 12, No.2 (1978), 145-150.
- Trager, G. L., and H. L. Smith, *An Outline of English Structure*. Norman : Batternburg, 1951.